

を六万衆と云うた。蓋し六万衆は亂暴衆の義  
頭。に立つ 其方が家を見捨てては  
後家も子供も路頭に立つ(女殺)  
乞食となるをいふ。

るませ、さい、とうらい、さんな、  
同じ事とよ豐川に、壁の高瀬がさ  
す腕には、はま、さん、きう、ご  
う、りう、すむむ。(冥途飛脚)

「うませ」は六、「まら」は掛聲、「とうらい」は  
十、「さんな」は三、「はま」は八、「きう」は三  
「さう」は九、「ごう」は五、「りう」は六、「すむ  
む」は四であつて、本拳に「唐音又はその説  
である。」「けん」を見よ。同じ事とよ云々は、  
拳の手同じことよとのよと同語詠豐川をら  
ひつづけ、川の縁より高瀬がさす濱にいひか  
けて八咫といひ、拳の勝負にはずんで高聲と  
なり腕を突出すをいひかけて、壁の高瀬がさ  
すかひなといふたのである。豐川、高瀬は遊  
女の名である。

るんじ  
「きり」ろろじを見よ。

# わ

わいかち 艦船に櫓をたてちがへわ  
いかちを入(最明寺殿)

【艦船】わきかちの音便。船の兩舷に附ける  
櫓。和漢船用集・卷十一、用具之部、偏舵の條  
に、「軍艦等わいかちと云は脇櫓にてること  
をいへり」艦船に櫓を立て云々を見よ。

\*わいだて 上帯草摺わいだてにむ

んすむんすと取付いたり(兼好)

【脇立】襦を着る前に右の脇にあつてゐる具であ  
る。札の上を築帯で包む。草摺一枚下りであ  
る。これを脇立の草摺又は右手の草摺と云ふ。

\*わいら 體自慢に人らしい扱と  
はほんの男の出入、わいらが知る  
こつちやない(酒香童) わいらが  
居ればやかましい、とつとと行  
け(博多)

「われら」我等の音便。汝等の意にもいふ。  
わうえん 第二番の懸物(晋のわう  
えんが筆の跡に、龍門の瀧の流れ  
を鯉の登る勢なり(大掛物)

「わうえん」王淵であらう。但し晋ではなう  
て元代の畫家である。古今萬寶全書に、「王  
淵字は若水と云、澹軒と號す抗人なり、幼に  
して丹青をならふ、趙文敏おほくこれに指教  
す、故に畫く所皆古人を師とす、一筆院體な  
し、山水は郭熙を師とす、花鳥は黃筌を師と  
す、人物は唐畫を師とす、一精妙なり、尤  
墨花鳥竹名にけし、當代の絶藝也。」

わうぎし 異國の王義之・趙子昂が  
石に入り木に入るも和畫に於て例  
なし(反魂香)

【王義之】支那昔の人、字は逸少、草隸に妙を  
極め、丹青も亦非凡。【王羲之】趙子昂が石に  
入り木に入る。を見よ。

わうきやう 玄雪の冬の夜はわが身  
を以て衾を暖め、三伏の暑き日は  
枕を拂ふ扇に黃香が遺風をあふ  
ぶ(持統天皇)

【黃香】字は文強といひ、後漢安陸の人。九歲  
で母を失うて父に事へ、夏月には枕席を扇  
ぎ、冬には身を以て温被して孝養を盡した。

博く經典に通じ文章を能くし、官尚書令に至  
つた。【王羲之】後漢黃香、字文強、江夏安  
陸人、博學經典、究三構道術、能文章、京師號  
曰天下無雙、江夏黃香、官至尚書令、郡太守、  
陶淵明曰、香九歲失母、思慕骨立、事父竭  
力致養、冬無被褥、而盡涼、暑則扇床  
枕、寒則以身温席、和帝嘉之、特加異禮。

\*わうくわん 市の進殿の差料に  
刻まれ骸を往還に曝す法もあ  
れ(續經三) 石の物言ひ壁に耳、殊  
更(こ)往還ぞや(遊義經)

【往還】街道。  
\*わうじやうずくめ 又五郎義長は  
わうじやうずくめの坂田の公時、  
後下りの懸烏帽子弘徽殿、目の前  
にて書かせしと申すからは、わう  
じやうずくめ如何なる難題書かせ  
しも知れず(升筒)

正しくは「あふじやうずくめ」(厭狀)であ  
る。人を無理におしつくること。無理厭狀。  
増補御書集覽に「あふじやうおして人にか  
かする文なり。」「盛衰記二十三人のものをも  
心を外にすかしとり、人をおどしておもふ  
謙の文をかかせんと仕るをば厭狀と申」  
と見え、又「あふじやうずくめ」むりあふじ  
やう。人を無理におしつくるをいふ、(和訓栞  
状より出たる詞なり)と見え、(和訓栞  
に「わうじやう」口語にいふは往生にて淨土  
門の詞也、よて往生すくめ、往生ごかしなど  
の俗語あり、文字に据たる也)とある説はい  
か。

王子王子は九十九所 飛鳥の宮・濱  
の宮・王子王子は九十九社(反魂香)  
抑も當社はこれ三熊野の、九十九  
所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】王子は九十九所、飛鳥の宮、濱  
の宮、王子王子は九十九社(反魂香)  
抑も當社はこれ三熊野の、九十九  
所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】王子は九十九所、飛鳥の宮、濱  
の宮、王子王子は九十九社(反魂香)  
抑も當社はこれ三熊野の、九十九  
所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】王子は九十九所、飛鳥の宮、濱  
の宮、王子王子は九十九社(反魂香)  
抑も當社はこれ三熊野の、九十九  
所の王子王子、若市王子とたたせ

【王子】王子は九十九所、飛鳥の宮、濱  
の宮、王子王子は九十九社(反魂香)  
抑も當社はこれ三熊野の、九十九  
所の王子王子、若市王子とたたせ

給ふ(孝常經)

王子とは、熊野行幸の時細休所毎、時に臨  
んで熊野本社を移し奉りた地で、熊野街道に  
は王子社が九十九あるといふ。蓋し九十九は  
大數をいふたもの。和漢三才圖會に、凡熊野  
王三權現社、自攝州東生郡至熊野地、有  
九十九所。

\*わうせうくん 唐の虞氏君・王昭  
君・貴妃・李夫人をうつつとも此上  
はよもあらじ(天智天皇)

【王昭君】漢元帝の後宮にあつて極めて美人で  
あつたが、匈奴に送られて薬を飲んで胡地に  
死んだ。

\*わうだう (用明天皇(振袖始))  
【王道】王道に對する稱、仁義を以て天下を治  
めることといふ。

わうだん 疑もなき黃疸神、汝の手  
では判の色も違ふべし(振袖始)

【黃疸】膽汁色素によつて皮膚粘膜等黄色とな  
る病氣で、皮膚の黄染と同時に癢痒を感じ、  
尿汗、唾液、膽汁、痰性分泌液は黄染する。療  
法として昔は吸物殊に鮑の味噌汁を多量に攝  
取した。

わうばん 曆なければ當年の吉方は  
知られども、わうばんも年徳も本  
國こそは恵方なれし(百合歌)

【黃幡】陰陽家の祭る八將神の一。軍陣の守護  
神である。和漢三才圖會、卷五、曆占類、黃幡  
の條に、「按黃幡以未辰丑戌四方、順巡之、  
如子年、辰、丑年、寅年、戌、卯年、未、以下  
亦次第如此、曆家云、向此方、司射初立、」  
わうまろにち この世からかかる苦  
患に往亡日、島田亂れてばらばら  
ばら(大經師音聲)



わきじろ 常江戸、脇城、國脇まで(薩摩歌)

脇城支城の義。出城をいひ、藩主の一族の者又は家老を以てその城主にあてる。

わきせき 二人の女のわきせきと、重忠の召されたる馬のおもづらしつかと取り(銚台歌)

「あくさく(薩摩)の轉訛。「わくせき」といふ。せはしくせづくこと。せせかしう思ふこと。

わきたむ この人世に出て申されば、千兩が萬兩もきつとわきため申す(西王母)

別。義。分辨す。辨償す。和訓疑に「わいだめ。日本紀に別字をよめり、又無分或は無節をわいだめなし」といふ、別をわきためともいふ、今わきためるといへるは分辨の意なり。今様二十四孝(寶永六年刊)巻之五に、「不足金をたとへ身ともわきためて出してなり」といふ、すむことならば濟ませませうす。

わきつば 悪くのしるものならば、山初めのやきとがし脇壺へ刺込んで、血わたを取らんと喚きけり(伊豆日記)

骨脇つばまで切り下げられ(齋藤出)

「脇壺腋下のくぼめる所をいふ。

\*わくせき 胸も心もわくせきして(薩摩歌) 藤屋吾妻がわくせきの思を乗せて在所駕籠(齋門松) 側へ寄りたいた抱付きたい言ひたい事のわくせきも、主人が見る目憚りて他人向なる折から(生玉) 心のわくせきする故か、鐘は四つやら夜中

やら聞捨てて数へもせず(薩摩歌)

「わきせき」といふ。その條を見よ。

わぐたむ ばつと亂れし髪髭は、金銀の針線をわぐため亂せし如くなり(龜池)

曲裾の義。結び髪。わがね曲げる。

わくらば 玄關の戸をとんとんと、叩くかへてのわくらばに、應ふる者も無かりける(夕暮)

病葉(うらがれて赤くなつた葉)に邂逅(たまさかの意をいふたもので、古今集、雑下部、在房年歌に「わくらば」といふ人あらば須磨の浦に、露瀝たれつわぶと客へら「わくらば」にいひつづけたるものである。

わくわうどうほね 和光どうほねきらひなく、千早振る棒八方無隅(聖徳太子)

「和光師骨和光同様に胴骨をひかけたのである。和光同塵とは、智の光を隠して、之を顯さないで塵俗の中に混じ居るをいふ。

\*わけ 四筋の町の軒深く、燈火星さす汐影のわけもよき、局局の手拭は、濡れぬ隙こそなかりけれ(齋門松)

「(分)一(分)の半分(1/2)の義。半分その條を見よ」といひ、勤銀五分ほどは下位の遊女(分)といふ、和氣などといひてあるのは當字である。西澤與志撰、御前義經記(正徳二年刊)に、「端女郎は總縁より下みせ女郎をいふなり、昔名はけちとも火打とも出家とも、局女郎とも端とも小松ともいふ、

位は二(勤銀)を一寸とも月ともいふ、二(勤銀)は一寸とも月ともいふ、三(勤銀)は一寸とも月ともいふ、又五(勤銀)を五歩ともわけて北向ともそりともいへり。日本好色名所鑑(元禄五年刊)大坂新町由來の條に「まづ置といふは三匁、陰といふは二匁、月といふは一匁分といふは五分、此付丁付は松風の語より出でたる」といふ、月はいつ、影は二つ、三つ置とある故に右の如く定めしか、三匁取取取は大方格子ある故にそれしや位を問はでも知るなり。齋門松のこの文は分(分)に次條の意の「わけ」をいひかけたのである。

\*わけ 徳様は何やら譯の悪いことありて、たんとぶたれさんした(曾根崎) 心利發で道中ようて、戀知りわけ知り(夕暮) 色もなく戀もなく、大事の女郎に立入りし御物語、さぞ譯知らずと思されん(酒吞童子) 上方は色所、定めて深いわけがある(博多) 旅の鄙人。地か(博多) さてもさてもわくこれうは誰人の子なれば(伊豆日記)

「譯分とも書く。すぢみち。仔細。また轉じて、戀の極。色道大鏡に「わけしり。粹といふまでの詞なり。當道の味をよくわきまへたるといふ心なり、これより出で分を立つるとも語分をたすともいふ。「わけ知り」とは粹なこと。「譯の道」とは色道即ち戀の道、「わけの杯」(「戀のこめる杯)、「わけ里」(「遊里」などとも見えてゐる。

\*わけ 徳様は何やら譯の悪いことありて、たんとぶたれさんした(曾根崎) 心利發で道中ようて、戀知りわけ知り(夕暮) 色もなく戀もなく、大事の女郎に立入りし御物語、さぞ譯知らずと思されん(酒吞童子) 上方は色所、定めて深いわけがある(博多) 旅の鄙人。地か(博多) さてもさてもわくこれうは誰人の子なれば(伊豆日記)

「譯分とも書く。すぢみち。仔細。また轉じて、戀の極。色道大鏡に「わけしり。粹といふまでの詞なり。當道の味をよくわきまへたるといふ心なり、これより出で分を立つるとも語分をたすともいふ。「わけ知り」とは粹なこと。「譯の道」とは色道即ち戀の道、「わけの杯」(「戀のこめる杯)、「わけ里」(「遊里」などとも見えてゐる。

\*わけ 徳様は何やら譯の悪いことありて、たんとぶたれさんした(曾根崎) 心利發で道中ようて、戀知りわけ知り(夕暮) 色もなく戀もなく、大事の女郎に立入りし御物語、さぞ譯知らずと思されん(酒吞童子) 上方は色所、定めて深いわけがある(博多) 旅の鄙人。地か(博多) さてもさてもわくこれうは誰人の子なれば(伊豆日記)

\*わけ 徳様は何やら譯の悪いことありて、たんとぶたれさんした(曾根崎) 心利發で道中ようて、戀知りわけ知り(夕暮) 色もなく戀もなく、大事の女郎に立入りし御物語、さぞ譯知らずと思されん(酒吞童子) 上方は色所、定めて深いわけがある(博多) 旅の鄙人。地か(博多) さてもさてもわくこれうは誰人の子なれば(伊豆日記)

「輪袿袴嬰袋の一種である。昔時は廣い嬰袋をたんで、細く圓うして首から胸に懸けたものであるが、今は幅二寸許にして褌に作り、胸に懸けて胸に垂らす。

\*わこ 憂き事知らぬわく様の、氣を奪はれ性根を取られ、起きつ轉んづ足立たず(徒戀) お通わこの子誕生、城之介春忠公の若君に紛れなし(三國志)

「和子」貴人の子を親しんでいふ。坊々「わこ」は男の側子。若様。「和子の義については「わじやう」の條を見よ。

\*わごぜ わごぜが常常あの男に心をかくるなりそぶり(用明天皇) 扱扱わごぜだちば情の強い男を持つた故(聖徳太子)

わごりよ わごりよだち若しもの事があつたりとも(歌念神) これ親父まつわごりよば誰なれば、よい年をして京の町の作法知らぬか(博多) さてもさてもわくこれうは誰人の子なれば(伊豆日記)

「わごれ」といふ。我御詞の義。「わごぜ」に同じく對稱人代名詞で男女に通じていふ。

わざくれ ちよ頼みを取つてはともう通れぬ、わざくれやけちや(薩摩歌) 繼母がかりのわざくれに悪性狂も出来るぞと(冥途飛脚)

全盛の時に見知りし木夫を、今暫ばかりを一  
生のをまめと以前の便を求め、花鳥といへる  
に逢初めしより。

**\*わざもの** 刀は薬物研ぎたてなれ  
ど、遂に女に試して見ず(女夫池)

「薬物」名士の銀へ作つた切味の鋭い打物  
利刀。

**わざをき** 彼處に芝居を構へ狂言師  
を集め、某も立ちまじりわざなき  
の狂言を仕り(松風)

「狂言」神憑の態をして神を招く義である  
態招て、神憑を讀廣せる文である。今官心中のこ  
こにへるは親鸞聖人の三帖和讃をいうたも  
のである。

**わさん** 後生願の親方の、宵にや和  
讃夜中にや念佛(今宮)

「和讃」多くは七五調を操返した今様の歌體  
で、佛徳を讀廣せる文である。今官心中のこ  
こにへるは親鸞聖人の三帖和讃をいうたも  
のである。

**\*わじやう** なうなうわじやう、物申  
さんと呼掛くる(嵯峨天皇)

「和七和上調の略。對稱人代名詞で敬稱に用  
ゐる。「わ」は和殿、和御前、和御料などの和  
と同じ語で、「五が」の義で、鎌倉時代の會話  
に多い。すべて親しい意の時は「わ」を用  
ひ、輕蔑の意には「な」を用ひる。

**\*わすれがひ** この世も忘れ貝、浦の  
磯貝うつせ貝(松風) 愛きこと暫し  
わすれ草、いざわすれがひ拾はん  
と(天智天皇)

「忘貝」軟體動物、斧足類に屬し、殼は扁平で  
厚く、前方少し尖り後方圓く、淡紫色で裏面  
は白い。色々の貝を拾うて愛さを忘れるとい  
ふ意から、貝を忘貝といひ、必らずし一種  
の貝名に限らない。萬葉集卷一に、「大伴の

みつづの漬なるわすれがひ、家なる妹を忘れて  
念へや。和訓栞に「わすれがひ。是もて心  
をなぐさめて愛さを忘るるよりいひて一種に  
は限らざるべし、よて人わすれ貝旅わすれ貝  
などもよめり」。

**\*わせる** さあ母のかまがわせた、何  
いばるととくるるの穴耳をつけて  
ぞ聞きあたる(女聲) 親父がここへ  
いつわせた時があれ、用があらば  
明日なりと明後日なりと松屋町へ  
いて逢へ(生玉)

「おはせる」(網遊)の約つた語。ござる。來ら  
れる。井原西鶴撰 胸算用・卷一、伊勢海老は春  
の紅雲の條に、「世間は免もあれ、婿が始めて  
體にわせて、伊勢海老なしの蓬菜が出さるる  
物か」。

**わそく** 「はそく」を見よ。

**わたい** 表の乗來呼うてわたい、話  
わとして紛らさん(博多)

「あたへ」(長崎)の約説。くれられよ。くだ。  
この語現今も長崎地方の漁夫などは往住用ゐ  
てゐる。

**わだかまる** 一旦主人の金をわだか  
まり、清十郎親子に無貨を言ひ掛  
け(歌念佛)

私曲の意、私かに着眼する。横領する。和訓  
栞に「わだかまる。姦字又姦をよめり、わだ  
かまるの義なるべし、まるノ反む也、よて俗に  
風曲の義にもいひ、

**\*わたかみ** 安西が綿嚙搦んで、ええ  
畜生劣りの悪人(津戸三郎) わたか

み取つて着せんとす(女聲)  
綿嚙または綿上とも書いてある。蓋し肩上の  
子音の轉じた語であらう、鏡の眼を釣る爲肩  
にある所をいひ、元は革で造つたもので、こ  
の名稱古くは本革にだにも見えてゐる。

**わたくり** 流行目の額すれど、目は  
綿繰で繰るやうで、響いて物も言  
はれぬ(生玉)

「綿繰」棉花を種子の間にかけせ、これを廻轉  
して棉花の纖維のみ通過せしめ、その種子を  
分離せしめる車仕掛。攪車。(厚云、この文  
に流行目といへるは、流行性結核病のこと)

**わたぐるま** 庄屋に並ぶ茅屋根も、  
内温に下女並んで紡ぐ綿車(甯康申  
「綿車」綿繰車又は糸引車を見よ。

**わたつみ** 柳の馬場のあここのと申す  
綿つみ教へる寺子取(酒吞童子)

「綿繰」「つむ」の條を見よ。

**\*わたどの** (用明天皇) 龜丸  
「渡殿」細殿とも。殿から殿へ渡る處、即  
ち長盛殿の意。

**\*和田の新發意** 仕方で講釋やられ  
た所、ほんの和田の新發意を見る  
やうな(大經師)

和田賢秀をいひ、剛直な勤王家である。雜髮  
して新發意といふ。楠木正行に従つて四條殿  
に戦ひ、敵に混じて師を相つて殺された。  
新發意は新に發心した義。發心とは發菩提心  
の略で、佛道に歸依することを見よ。

**和田のそごつ** を  
「かいらそ和田の云云」を見よ。

**\*わたばうし** 色眞黒なる老女大綿  
帽子の額より皿のやうなる目を見  
出し(孕帯)

れ、こゝへこゝへといはるるにぞ、  
綿帽子取つてしとやかに(安限切)

「綿帽子」眞綿を織みひろげて作り、年増老女  
婆の被つたもの。飛州府志(貞享三年刊)土産  
門下に、「婦人以手織白綿、爲片而造布  
綿、其狀形有大小之異、然總稱綿帽子、老女  
多蒙頭。襪のをだ巻に、「昔は女の帽子と云  
ふものを被りたて歩たり、綿帽子は年季三  
四十已上の町の女のかぶるものなり、若き  
女は白に紅のちらを付て被りたり、扱其ばら  
しをとむる針を額にて物好に拵ひ、鼻屑の歌  
舞役使者の紋所をうたせたり」

**わたもち** 紋とひわたもちの釋迦阿  
彌陀が出たるとて用明天皇 わた  
もちの大黒殿ちと拜み奉らんと、  
其手を取つて引出し(舞丸)

「齋持」齋を持つて生きてゐる者の義。生身。  
「齋持」齋を持つて生きてゐる者の義。生身。

**わたんりやうげ** 和丹兩家の典藥配  
劑醫藥を盡せども(女護身)

「和丹兩家」醫道の家柄なる和氣と丹波との兩  
氏。和漢三才圖會卷七、人倫類に「典藥頭」  
醫道有和氣丹波兩氏、而和氣氏終於堂上、  
而今稱平井、官醫其末孫也、丹波氏終於典藥  
頭、每歲奉調進藤蘇白散」。

**わちがひ** 龜甲輪途  
花靱(五人兄弟)

「輪途」教所の名。夜討  
會狀(古活字本)に「わ  
ちがひ」とあつてこの  
紋が載つてゐる。

**わちゆうさん** どつ  
いどこぞで此損  
なうめの木の是齋の辻で、身を粉  
にはたいてやつて見た、和申散で  
もきくにこそ、金に直いで一步二



【ひがちわ】

朱の借錢負うて(丹波興作) 誓文

元和中散、身を粉薬に御奉公(齋摩歌) 往きか戻りに顔見よと、濱側を用ありげに往つ戻つ、入りもせぬ和散買うたり、と、ろてん屋の水からくりも、さうさうば見てゐられず(生玉)

「和散」腹痛などに效能ある寶藥の名である。元祖を津田宗左衛門藤原是齋といふ。後に代代織田菅十郎と稱した。藥は元和頃から賣始め、次第に販路ひろまり諸國に及んだ。曾補松の落葉(寶永七年刊)卷四、梅の木露の唄に、「昔より賣りはじめ候梅の木村の和散、君の病は思ひか戀か、その藥はじよきいでござる、こちらの家にはじよきとはござらぬ、じんじやくむねむしこはりはら、酒の二日酔にはよねや若衆のやとんとんとん、ねがはでのまんせの、のまんせののまんせの、萬のむしに第一の藥ぢや」。秋里雜島編 東海道名所圖會、卷二に、「梅木、本名六地蔵村なり、ここに和散の聖店三軒許あり、是齋を本家とす、……ここに元和の頃梅の木あり、其木陰にて和散を製し旅人に賣ふ、本家をせまといふ、其初は織田氏に號して、元和元年醫師半井十益が女を娶て、和散小兒藥の奇妙丸等の藥方を授かり永く此家に傳ふ。好色旅日記(貞享四年刊)卷三に、「梅の木村の和散ちかき比より名物になれり」、「うめのみせまき」をも見よ。

\*わつば 古郷の妹よ弟よなどと、わつばやめらうを連れて來る用明天皇) 彼奴音に聞く不敵のわつばよな(關八州)

\*わだの わだの屋島にて功名の様

わりは—わりん

わ 語つて聞かせ給へ(出世景清)

「和殿」和歌人代名詞で敬稱に用ゐる。貴殿。「わは和御前、和御料、和上臈、和僧などの和と同じ語で、「わが」の義である。「わじやう」の條を見よ。

\*わにぐち 天満に年經る千早振る神にはあらぬ紙様と、世の鰯口いのるばかり(天網島) やれやかまし、其外おさん(鰯)の口、口のついでに(口)と頰をよすれば(大經師) 鰯口(鰯)の口を吐くことを願ふ。また神註や佛堂の前庭に懸け、銅製で扇面中空で下方に横に長き口あるものを鰯口といふ。鰯口の前に布を斜へる繩を下し、妻話人その繩をとつて打鳴す。鰯口の名は其形狀が鰯の口に似たるよりの俗稱で、其製は伏魔殿を二つ合せたものから起つたもので、鎌倉時代の中頃から出来たものであらう。心中天網島のこの文は、「年經る」千早振るの同語を連ね、神に天満宮、紙に紙屋治兵衛をまかせ、神の縁から鰯口をいかけたもので、いつもなかに老練神妙の筆である。

輪拔に角の棒 駕籠は輪拔に角の棒、美濃の加納の主なり(薩摩歌) (これは美濃加納の主の駕籠標は、なきて、美濃大垣の城主戸田采女 正氏定の駕籠標) \*わもじ 物部の守屋とはわもじの事か、珍しい對面し(禰鹿歌) (これは美濃加納の主の駕籠標は、なきて、美濃大垣の城主戸田采女 正氏定の駕籠標)

\*わだの (和殿)「わむし」(和主)の文字詞である。貴君、そなた。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微にして供御の物が備はらなかつた爲に、女官等その物の名を呼ぶを忌みて何文字というた體語から起つたといふ。



輪拔の角に

\*わや 既にどうへ取るる處を我等仕懸てわやをいひ(大織冠) の敷きを見るからば情も料簡もあるべきこと、此上はわやにする、取戻いでくれんすと駈出づる(雪女) さほど澤山な一歩を戻すまいとはそりやわやぢや(生玉) ひこひこす(生玉)

「わやく」と無著無著の。「この語わやく」(無著茶室) 統つてきた語である。小室(その條) など同じ縁の語であらう。小室(元禄九年刊) 卷二に、「かんたんの枕の條に、「はやしし 倍の金をせせられわやにもならず云云。」「わやくは現今も中国地方でこにへる意に用ゐる。岐阜津加茂郡東白河村地方では無分別の意にいふ。藤原川(古浄瑠璃) 第四に、「例のわやの大きに怒り」とあるわやものも無分別者亂暴者の意である。

\*わやく 女犬と男犬とが戀をして、その男犬ががんまくなわやくも(千正犬) 扱扱いづれもわやく人かな(西玉母)

「わらく」と「枉惡」または「証惡」の約説。無道。むちや。といふ。易林本節用集に「枉惡。无道義」と見え、証草元禄十四年刊に「枉惡。无道義」と見え、証草元禄十四年刊に「枉惡。俗に人を欺き証かしたる者をわやく」と云此字也」と見えてゐる。和訓栞に「わやく、明善上人の傳にみゆ、俗にわやくといふに同じ、証惡の音を和語とせらるべしやくな故、内に居る妹と喧嘩ばかりする故、妹は氣のある奴で京へ上つた」

わらうだ 勅使わらうだに着き給へ(天智天皇) 「わらうだ」(兼善)の音便。圓座をいふ。和名抄に圓座を訓み、眞字伊勢物語に圓を訓んである。蒲葉を圓く平く組み、徑二尺ばかり、厚さ二寸あまりある動物で、後世のは織綿などに包んで作つてゐる。

わらびもち さあ日坂のわらびもち(丹波興作)

「蘇餅」遠州日坂の名物である。日坂は東海道五十三次の一で、道中の客はその驛で蘇餅を賞玩して通つたものである。その古きは天文十三年の宗牧の東國紀行にも、「年たけて又く見えしと思ひきや、蘇餅もあも命なりけり」と「日坂はわらび餅の名物なり、葛の粉にてつくり豆の粉をまぶして旅人にすすむるに、往來の人ひだるさまぎれに蘇餅なりと思ひて、遂に葛餅なりとは知らずかし」。

わりぎくもん 分けてわりなき割菊の紋の風呂敷引き包み(今言) (割菊紋) 菊花を割つて紋にしたものを云ひ、菊花の半分を二つ、丸の中に畫したものを二つ割菊の紋といひ、其他三つ割菊の紋など種種ある。この文は、わけわりなきわり菊と同じ頭韻によつて文を飾り、「わりなき」は別無で、頭韻に「つて」を添へて「わりなき」にせ(大織冠)

\*わりご 折折破子小竹筒を參ら(破子) 破籠の義。一種の辨籠箱で内に隔があつて半割せるが如きによつて、徒然草第五十段に「風流の破子ちの物云」とありて、林道春の註に「破子の破籠とも書けり、飲食を入る具也、和名竹筒、今俗所云破子是也、以飴送人也」と見えてゐる。



菊割ツ三

わりしころのかぶとづきん 割鏡のかぶとづきんはつこみはつこみ目ばかり光る面鏡、夕立響るる雲間より星のきらめく如くなり(弘徽殿)



「割鏡兜頭巾」鏡の「わりしころの兜頭巾」割れた兜頭巾である。兜頭巾は江戸時代に武士が火事警束の際につたもので、其形兎に似て、綴は羅紗で作り影系をもつて華麗に飾してある。

\*わりなし 子とも舞ともかしづき給ふ心ざしこそわりなければ(出世景清) この灘を越す様あらばどうぞ指南はあるまいか、わりないことよと宣へば(最明寺殿) 登方ない。別無し、また理無しの義。親しうて隔のない。分別のない。

\*わること 銀くれる遣手に水くれるとはわることなと、笑をほにいひしらけ(反魂香) ここは傾城町と申して、諸萬人の立合わることの寄合(五人兄弟) 長う末社のちよつと借着に(雪女) やあ例の龜井片岡がわるごうするなどいふ處へ(派鏡經)

「わること」悪事の轉。いづら(惡謔)。わること(「ごんごう」は「ごん」の條を見よ)。錦文流弊。傾城八花形(珊瑚)に「惡酒落やむごう仲間」などとて、これを打こみ罰金をむちり。\*あるする 尼の話が蘭が噂に似た故に、そこを以てわるすぬか、イ

ヤこれはいかいおはまり(薩摩歌) 「懸推懸い推懸。邪推。

\*われから 藻にすむ蟲のわれから(國性齋) 蟲の名である。海藻中に棲息して藻に似てみ

われならなくに 我ならなくに我心弘徽殿と入替り(酒香童子) 我ならぬに。「なく」は「ぬ」の延語。古今集、藤四郎の歌に、「陸奥のしのぶもぢずり誰故に、亂れむと思ふ我ならなくに」

われもかち 桔梗白菊たはれ草、引く手を取りてわれもかち、はや歸らんと夕顔や(天冠) 「吾木香薷微料に屬する草で、莖の高き三四尺に達し、葉は藤に似て羽状複葉をなす。秋の頃莖頂に紫色または紅白色の小きき花簇生しひかけたのである。

\*わち 佛にさへ油斷させす責め使ふわちやもの、衆生を責めるは道理ぢや(薩摩歌) 阿波座からうるさいわちが見えるぞえ、ほんにほんにせいこきの彦さん、しかもずぶずぶ酔うた足元(靈門松) こことなるまいし如何に事觸とて見通ではあるまい(弘徽殿)

「わらは(童)の約朧であらう。わつば。人を罵つていふ。和訓栞に「わら。蕪葉集に我とふ意にへり、俗語にはわらうともいふ。わらはの詠なるべし。

\*わわし 得たり顔にかやうにわわしく振舞ひ給へば(一心五戒魂) 名義集に「輕」を訓んである。みだりがはしい。口やかましい。心くねくねい。増鏡秋

\*わわら 所詮恨みは父めにあり、踏殺して埒明けんと飛びかかる、妹の小梅わわらつき、ええ畜生め食付いて呉れうものとしがみつ(天神記) つつ立ち入らんとするを五百機驚きわわらつき、餘りな無理無體、穢い忿心持たうよ(振袖始)

わいわい騒ぐ。騒しう聲立てる。わめく。魂體色遊櫻男、大名展り小判でつらをはり枕の條に「こなただこの人ぢや、家持なら町へことわるとわり出せば下女は笑止がり。藍染川(古淨瑠璃第一)に「邪腹をなすは推妻なり」とわりかかつてのしれば

わんざり 雑煮の上置わんざり大根(雪女) 身は切賣の西瓜面、蓮花割かわんざりか、太刀刀にも及ば(こそ弘徽殿)

「わざり(輪切に撥音「ん」の増加した語で、「いま(今)を「さんま」、「みな(皆)を「みんな」、「わね」を「よねん(を)見」、「びくに」(比丘尼を「びくに」を見よ)、「ただ(只

を「たんだ」、「ゆえ(所以)を「ゆえん」、「まな(眞字)を「まんな」などといふの類である。

\*わんざん 大學聞き、これはわんざんなること仰せられます(壬生大念佛) なう我が腹の立つまにざりとてはわんざん(天竺冠) 惚れて進でる男はざん減多腹が立つてのわんざん、何方の御意見でも聞入れのある氣質でない(振袖歌) 常わんざんとは事かはり、道理至極に返答なく(薩摩歌) たつて申せば繼母のわんざんなどと名を立てて伊百日記

\*わんざん(和訓に撥音「ん」の増加した語。まかしらの意(かく「ん」の増加することに就いてお。保元物語に、「これは清盛がわんざんにこそあるらう。曾我物語 卷八、畠山歌にて訪はれし事の條に「今にはじめぬ梶原がわんざん」とは言ひながら。影林本、節用集に「和護」とありて「サカシウ」と振假名が附けてある。

わんづか 女郎儀はこの丁稚とわんづかばかり言ひ交し、露の命も捨小舟(加増智)

「わづか(撥音「ん」の増加した語。「わんづか」は「言ひ交し」とは「互に少しばかり語り合ふ大馴染の者である」との意。\*わんばう このわんばうは兵吉に貴殿よりの御しきせ、箱に納め月月の朔日毎に頂戴す(三國志) 金銀衣類はいふに及ばず、身に纏ひや古わんばう、腰にさいたまばやばや抜いて渡せ(蠟山遊)

袍」とある。「纏」はからむしの綿入(衾著)、「袍」は衣のなかわた著あるものをいふ。川柳の句にも「わんばうで背中かくと女宿いひ」など見えてゐる。

わんば 兩人共にわんばを脱げ、我が酒手にする(十二段) 身代もいしくなつてわんば一枚にはなつたれど(加増會枝)

「わんばう」ともいふ。「をんばう」(纏袍)の訛。「わんばう」を見よ。

# ゐ

**\*ゐあひ** ひらりと抜いたる居合の早業、神木の松を相手取り木刀翳し、跳上つて聲をかけ(國性爺)

兩方りきむ居合腰、太刀の柄も摧けよと握りひしぎ(烏帽子折)

「居合」居ながら敏速自在に刀を抜き差し、敵と立合ふ劍術の一派。合類大節用集、書解門に、「居合」劍術、林崎重信未派也、又謂之利方。人倫訓蒙圖彙卷二に、「居合は太刀討の根元なり、兵法といふは敵に向つて太刀をあはするは腰より抜出しての上也、抜かずして兵法あるべからず、然れば抜くを第一とす、長短の打物によつて抜きやう品々あり、又は所の圓狹地形の高下と坐したると立ちたるとあり、敵に其色をさとらせず柄に手をかくるより、抜出す速速によつて勝負の二道ここにあれば、いかでか學ばずしてあらんや、諸流多き中に開口流其名高し」とありて、坐して右膝を立てて長刀を抜いてゐる繪が載せてある。

「居合腰」とは、坐して右膝を立てて居合の身構へする腰付をいふ。

**ゐがん** 十二の槍、十二の投、立がん、居がんで、強みの腰(井筒)

「居股」相撲にて、給十二手の一である。うたちがん」を見よ。

**\*ゐぎやう** 天上に現はれ出で、異形は手を伸べ、檢非違使が居合を割れて退けとばたと打つ(二枚摺)

「異形人」と異なる形の義。鬼または妖怪の類をいふ。

# ゐ

**\*ゐまきやく** いらぬ化粧業、何ともゐまきやく千萬といへば(國性爺)

「通格」不都合。書字考節用集に、「通格」格別格式也、見「離原抄」、又用「通却字」。和訓彙に「ゐまきやく。通格といへり官府語なり、通却にあらず、通格の字海東語圖記に見ゆ。

**ゐくびにきる** とつばい頭の黒塗兎猪頸に着なす(川中島)

「著猪頸」兎を仰ぎて載くやうに被るをいふ。猪頸は猪の如く縮頸の義。

**ゐげん** 「さんげん」を見よ。

**ゐづくみ** かういへば忠兵衛を憎みそれむかうなれど、ゐづくみぞあの男が身のなる果がかばい(冥途飛脚)

「居謀備る」に於ては神佛の冥罰を蒙つて、忽ち身動きもなす居謀みとなることもある。意で、自誓の詞である。當世大和言葉(著者及詳ならぬ)慶安から)に、「人と雑談しける時寛文頭の間作か)に、「人と雑談しける時か)りそめごとにも、佛、天道、神八幡、氏神照覽、ゐづくみ、みしやり、此火に焚きせられらぞ、などおそる敷言する事はなはだよからぬ事といへり云云。

**\*ゐだいけぶにん** 一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得。ゐだいけぶにんの無上恩にあやかり給へ母上様(百日會枝)

「章提希夫人」梵名 Vaidhi、譯して勝妙身などといひ、摩訶陀國、頻婆娑羅王の后で阿闍世太子の母である。太子の爲に牢獄に幽閉されて佛法を求め、釋尊乃ち親臨されて夫人の爲に説法された、親無量壽經これである。委しくは親無量壽經について見よ。

**\*ゐだてん** 黒谷の東岸和尚衣の袖をまくりあげ、章駄天の如く飛來り(天經師)

「章駄天」梵名 Veda、章天將軍ともいひ、略して天神ともいふ。甲冑を著して直立し、兩手で寶劍を揮持してゐる。淨行を修して佛法を外護し、利生化益を主として群生を濟ひ給ふ。嘗て足疾鬼が佛舍利を奪うて逃走した時、これを追及して取戻したといふので、疾走の神として世に知られてゐる。

# ゐ

**ゐづつこのまろがたけ** (本領會枝)

「まろがたけ」を見よ。

**ゐづつこのせん** 昔の井筒の女とやらは、妬のほむらに提子の水が湯となつた(天經師)

「井筒女」ひさげの水が湯となる」を見よ。

**ゐて** 樋の口の井手の水草のみなぎつて(卯月紅葉)

「井手」樋手の義。杭を打つて水を塞ぎ止める所。堀。

**\*ゐてん** 大織冠といふ冠を脱がせ、位田の所領を取上げ(大織冠)

「位田」一品から四品まで正一位から從五位に至る、その位の者に給せられた田をいふ。大寶合によれば、一品八十町、二品六十町、三

品五十町、四品四十町、正一位八十町、從一位七十四町、正二位六十町、從二位五十四町、正三位四十町、從三位三十四町、正四位二十四町、從四位二十町、正五位十二町、從五位八町と見えてゐる。これ等は時代によつて變遷がある。

**井戸へつられた大黒天** (雪女)

「ねらうてん」を見よ。

**\*ゐれうかつがう** 皆南無阿彌陀佛とひれ伏してゐれうかつがう申しけり(井筒)

「阿彌陀佛」阿彌はとりかむこと、「週仰」は佛法に對して信仰放棄の念を起すこと。法華經(普賢品)に、「心懷恭敬、週仰於佛」。書言字考節用集に、「阿彌陀佛、義楚六帖、周圍曰、坐遍曰、繞」。

# ゐ

**ゐのきはかけ** 横に難ぐる切先、金吾が膝節猪の牙かけ、これも尻居にどうど居て(井筒)

「猪牙掛猪の牙に掛つて跳ね飛ばされたやうな負傷の意にいらうたのである。

**\*ゐのこ** やがてゐのこ、や五六里、十死も過ぎて(天經師) 一昨年の十月中の亥子に火燧明けた祝儀とて(天經師)

「亥子」亥猪とも書き、十月亥の日の稱、古來北斗の斗柄が亥に向ふといふによつてこの稱がある。上の亥の日の亥の刻に亥子餅を食ひ又火燧を明けるなどの慣習がある。但言集覽に「初亥は順集に十月初の亥の日右大臣女御の火桶にもちひをもとりて内裏の女房につかはすと見えたり、禁中にて嚴重の餅といひ、俗に支焼と稱すと年中行事にいへり、愚案今俗十月初亥に火燧を明くも是より起る歟。巢林字は火燧の明け初めを十月初亥日